

津波災害が自閉症スペクトラム障害児・者の生活に及ぼす影響

小川 博敬

1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に東北地方を中心に発生した東日本大震災では、死者15,875、行方不明者2,725の人的被害が出た。建物被害は全壊129,656戸、半壊266,834戸であった。この震災において、岩手県内で障害者手帳を取得した者の死者数は263人であった。先行研究では地震災害が発達障害及び自閉症スペクトラム障害に与える影響については明らかにされているが、津波災害が自閉症やアスペルガー障害などの自閉症スペクトラム障害児・者の生活に及ぼした影響や、地震災害時における障害特性を踏まえた上での支援のあり方、自閉症スペクトラム障害があるが故の避難生活の困難さについては明らかにされていない。本研究は津波災害が自閉症スペクトラム障害児・者の生活に及ぼす影響について明らかにすることを目的として実施した。

2. 研究方法

調査対象者は、「東日本大震災で被災した自閉症スペクトラム障害児・者の家族7名」とし、被災の定義は「住居損壊により自宅以外で1日以上避難生活をした者」とした。調査期間は平成24年5月から8月に実施し、データ収集はインタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。面接の内容については7名分のインタビュー内容から逐語語録を作成し、コードの中から類似する見出しを合わせてサブカテゴリー、カテゴリー化する手法を用いた。

3. 結果と考察

調査の結果、障害特性に起因する震災発生直後の避難行動の特性、災害の種類と障害特性を考慮した上での避難訓練の必要性、「避難所に入れなかった」「避難所での生活は難しかった」等避難生活の困難さ、要援護者登録のシステムが周知・機能していなかったことが明らかになった。本研究は自閉症スペクトラム障害児・者における障害特性に特化した避難訓練の必要性や、地域における防災訓練や避難所運営のあり方に示唆を与えるものと考えられる。

元路上生活者の居場所の欠如と生成に関する研究

後藤 敦博

今日のホームレス支援の状況として、脱野宿後の継続した支援が行われ、その一つとして「つながり」「役割」を含む居場所づくりの機会が支援者により提供されている。しかし、居場所の中に存在する「共通言語」というハードルをクリアできなかった者は居場所からまれ、誰にとっても居心地の良い居場所にはなり得ず限界があることも指摘されている。元路上生活者一人一人に合った居場所づくりの機会が提供されるためには、支援者の専門知や経験知により提供される居場所ではなく、元路上生活者一人一人の語りを出発点とした居場所づくりが必要である。

本研究ではこのような視点に立ち、6名の元路上生活者と居場所の生成に寄与していると考えられる5名の支援者に対しインタビューを行い、元路上生活者の居場所観およびその欠如についての考察(研究1)と、支援者の居場所支援について検討することを目的とした(研究2)。

研究1の結果と考察では、「元路上生活者に共通していると考えられる語り」と「居場所への意味付け」に語りが分類され、不安定な就労やその他複数のきっかけにより路上生活へと至り、支援者との出会いから居住環境と他者とのつながりを含めた居場所を得ることで、将来への展望を抱いているという、居場所の欠如から現在の生活までのいきさつが明らかとなった。居場所観としては「物理的」居場所観と「精神的」居場所観があり、場所そのものには多様性があることが示された。また研究2では、「実践の土台」と「実践」と考えられる語りに分類され、元路上生活者の居場所の生成に寄与している支援者の考えと実践が可視化された。

2つの研究から、元路上生活者の居場所支援において本人が居場所を欠如した背景を理解することが重要であり、支援者の専門知と経験知によらない多様な居場所を意識した支援や利用者への対応に限らず本人らの声を社会へ代弁する等、様々な面で元路上生活者の多様な居場所が生まれやすい取組みが必要であることが示唆された。